

5

18世紀ロンドンにおける解剖学私塾の興り

— ウィリアム・ハンター解剖学校設立の背景 —

土屋江里子, 坂井 建雄

順天堂大学大学院 医学研究科

ウィリアム・ハンター (Hunter, William 1718-83) は18世紀後半で最も人気の高い私設の解剖学校をロンドンに設立し、英国の解剖学教育を切り拓いた第一人者として認識されている。ウィリアムの解剖学校以前のロンドンの解剖学教育の状況と、設立に至る経緯を報告する。

16世紀からロンドンでは理髪外科医組合が解剖学の授業を行い、組合員に出席を義務つけていた。この授業では内科医が読み手 Reader として解剖学書を朗読し、外科医が解剖者 Demonstrator として解剖体の執刀を行った。解剖体は組合が入手した刑死体で、数日かけて解剖示説を行い、参加者はそれを見学して学ぶというものであった。その当時は国から与えられる解剖体は年間4体のみで、解剖体は常に不足していた。また組合が解剖示説を独占していたため、解剖学の学びを求める学生はエジンバラやヨーロッパ大陸に留学することを余儀なくされた。

17世紀中葉から大陸では、大学の専任の解剖学教授が人体解剖を行い、定評のある解剖学教科書が出版されるなど、解剖学教育が充実していた。イギリスでも人体への興味関心が広がり、医学教育における解剖学の需要が高まるにつれ、18世紀初頭からロンドンでは解剖学私塾が徐々に開校されはじめた。解剖学私塾の存在を示す資料として最も古いものに1701年のGeorge Rolfeによる私塾の新聞広告がある。その後いくつもの解剖学私塾がロンドンに登場したが、講義形式や講義内容には変化が見られた。講義形式は読み手(内科医)+解剖者(外科医)の2人体制で行なっていたものから、内科医による解剖実演型、外科医による解剖実演型とそれぞれが単独で行うようになり、多くの解剖私塾は外科医が開校していた。また、解剖学の教材は実際の死体が理想的であり需要があったが、入手が困難であったことから、蝨人形や乾燥標本、液潤標本などを用いた講義形式が発達した。さらに講義の内容については、人体解剖学に加えて比較解剖学、外科手術、包帯法、助産学、神経学等が追加され、より医学包括的な内容へと充実した。しかし理髪外科医組合では組合員に対する義務的な解剖学教育を継続して行っており、組合外の解剖私塾は大きな制約を受け、死体を用いた人体解剖は困難であった。

1745年に理髪師組合と外科医組合が分離し、解剖学私塾に大きな影響を及ぼした。外科医組合は人体解剖を行う場所を失い、組合外での人体解剖を容認せざるを得なくなった。この状況の中で翌1746年に、ウィリアムの解剖学私塾がコヴェントガーデンに開設されたのである。ウィリアムの私塾が成功したのは、2つの大きな要因があると考えられる。一つには18世紀初頭以来の解剖学私塾が発展させてきた授業内容を継承できたこと。もう一つには人体解剖を大幅に取り入れたことである。高額な報酬を払って多数の解剖体を確保することで、学生自らが人体解剖をできるようにし、それをバリ方式と呼んでアピールした。ウィリアムの私塾では臨床に役立つ解剖学講座に加えて、有償のオプションとして実際に死体を用いた解剖実習を行うことができた。この結果、ウィリアムの私塾は、当時の私塾の中で最も人気を博し、ウィリアムの死後もチャールズ・ベル (Bell, Charles, 1774-1842) など後継者たちによって経営された。そしてこの解剖私塾は1830年代に始まった大学での医学教育の中に取りこまれた。

ウィリアム・ハンターの解剖学私塾は、市場の熟成と法規制の緩和、先人の解剖学者たちによる試行錯誤など、解剖学教育を発展させる基盤が十分に整った中で誕生し、ロンドンの医学教育校として大きな成功を収め、19世紀以降のロンドンの医学教育の礎を築いたのである。